

2020/10/25

ヨハネの福音書 講解メッセージ②①

『うわべで人をさばくな』ヨハネ 7:19-24

✂ あなたがたは律法を守っていない

「モーセがあなたがたに律法を与えたではありませんか。それなのに、あなたがたはだれも、律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか。」群衆は答えた。「あなたは悪霊につかれています。だれがあなたを殺そうとしているのですか。」(ヨハネ 7:19-20)

イエス様がパリサイ人に語った言葉に対して、群衆は「悪霊につかれている」と言いました。当時、イエス様に対する群衆の評価は賛否分かれていたことがわかります。

イエス様はこの時、パリサイ人に対して「あなたがたは律法を守っていない」と言いましたが、パリサイ人は律法の行いを厳格に守る人たちです。それなのに、なぜイエス様はこんなことを言ったのでしょうか。

それは、彼らにとって律法とは行いの規定であり、行いを守っていれば律法を守っていると思っていたからです。しかし、神にとって律法とは心の規定です。彼らは人を殺したら罪だと思っていましたが、殺そうと思っているだけなら罪ではないと思っていました。イエス様はそのことを指摘なさったのです。

「兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。」
(ガラテヤ 5:13-14)

聖書は、愛することを教えています。それが神の律法です。イエス様は、彼らが愛していないから律法を守っていないと言われたのです。

「私たちは自由を与えられるために召された。」とありますが、自由とは何でしょうか。肉の働く機会とは何でしょうか。

人から意地悪されると、一般的には腹が立つものです。「意地悪されたから、仕返ししよう」。これを因果律と言います。因果律に従って何かを選択することは自由ではありません。動物の反応と同じです。因果律とは、原因があって結果があるということで、これが肉の働く機会になっているということです。

自由とは、意地悪されたら相手を憎まず愛することです。これは因果律ではありません。自由とは因果律に従わないことです。私たちはこの自由を与えられ、ますます実行できるように召されているのです。

因果律に従うのは、過去に縛られた奴隷です。愛を持って互いに仕えることが、あなたを自由にすると聖書は教えます。過去の指示に従うのではなく、神の愛、神の律法に従うことが自由です。あなたは自由を選んでいるのでしょうか。それとも因果律に従っているのでしょうか。

✂ 律法の役割

「イエスは彼らに答えて言われた。「わたしは一つのわざをしました。それであなたがたはみな驚いています。モーセはこのためにあなたがたに割礼を与えました。——ただし、それはモーセから始まったのではなく、父祖たちからです——それで、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。もし、人がモーセの律法が破られないようにと、安息日にも割礼を受けるのなら、わたしが安息日に人の全身をすこやかにしたからといって、何でわたしに腹を立てるのですか。」（ヨハネ 7:21-23）

ユダヤ人は、モーセの律法を守るために、安息日にも割礼は施していました。それなのに、イエス様が安息日に人をいやしたからといって、なぜさばくのか、律法の本質を考えるようにイエス様は言いました。

今も昔も、私たちは律法の行いを人の価値の判断基準に使っていますが、それは間違いです。律法は人を裁くためにあるものではありません。律法の目的は、自分の罪に気づかせ、自分が罪人であることを悟らせるためです。それを知って、神に赦しを求め、神の元に行くためにあるのです。

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。」

（ガラテヤ 3:22）

「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」（ガラテヤ 3:24）

当時、「聖書」と呼ばれていたのは、律法の書のことです。人を罪の下に閉じ込めたのは律法です。信仰とは、行いではなく、ただ神をより頼むこと、神に助けを求めることです。それによって人は癒されていくのです。罪は病気です。癒されなければなりません。

神様が律法を与えた目的は、私たちが罪人の自覚を持てるように私たちを罪の下に閉じ込めて、イエス様に導くためです。つまり、病気に気づいて医者の方に行くためです。神様と私たちの関係は、神さまが私たちの重荷を背負い、私たちを休ませてくださる関係です。決して、何かを頑張って神様にほめてもらおうとする関係ではないのです。

✂ うわべで人をさばくな

「うわべによって人をさばかないで、正しいさばきをしなさい。」(ヨハネ 7:24)

1. なぜ人はうわべでさばくのか

私たちがうわべで人の価値を判断するのは、死が入り込んだ結果です。死とは有限性のことです。有限性とは、始まりがあって終わりがあることです。アダムが罪を犯す以前は、人は朽ちないからだをもっていたのですが、罪によって死が入り、有限性になりました。その結果、霊的なものが認識できなくなり、有限なものしか認識できなくなったのです。有限なものとは、体積の中にあって時間と共に変化するものです。しかし、神は体積を持たず、時間の流れの中にもいません。空間も時間も持たないものを「霊的」と言います。しかし、人は、現在・過去・未来という時間と空間を通してしかものを認識することしかできません。これが有限性の特質です。つまり、物事をうわべでしか認識できなくなったということです。死が入り、有限性になった結果、自分を見るときも、人を見るときも、容貌、変化、経歴、行いといったものを比較することでしか価値を判断できなくなり、それによってお互いを違う価値とするため、うわべで人をさばくようになったのです。

2. なぜうわべでさばいてはいけないのか

うわべで人をさばいてはいけない理由は、それが罪の行為につながるからです。容貌や行いを比較するためには、規定が必要です。すると、規定に違反する人を見ると、「私はがんばっているのに」と怒りが生じます。

「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」

(ローマ 4:15)

行いの規定で人をさばくから怒りが生じるのであって、うわべで人をさばかなければ怒ることもありません。私たちが怒るのは、相手に腹を立てているわけではなく、行いの規定で見ることによるものです。

たとえば、暴走族の騒音に怒りを感じる人も、もし夜間暴走族に起こされたら政府が10万円保障してくれるという法律ができたなら、暴走族の音が心地よく聞こえるようになり、暴走族を待ち望むようになることでしょう。

つまり、事柄が怒りを引き起こしているのではなく、自分のものさしが怒りを引き起こしているのです。その問題の根本は、行いによって価値を定めようとするところにあります。うわべで見ると、自分が苦しくなるからやめるように、神は教えているのです。

3. そもそもさばけない

うわべで価値を判断することができないそもそもの理由は、私たちの価値はイエス・キリストの価値と同じだからです。ぶどうの木と枝を区別することができないように、キリストの

からだの一部である私たちには神と同じ価値があるのです。私たちのいのちは神のいのちの上であり、神と一つの存在です。それはいつだって最高の価値があり、人が判断する対象ではありません。

どんなにうわべを良くしても、神からいただいている価値と比べれば、ちりほどの違いもありません。うわべで人の価値をさばくのは、愚かなことです。

「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえないさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」(マタイ 6:28-29)

神様は、「あなたは私と同じ価値がある。」と言っておられますが、死が入り込んだために霊的なものが一切見えなくなった私たちには、本当の自分の姿がわかっていません。一生懸命うわべを飾って互いに裁き合う私たちに、「あなたはもっと尊いものなのだから、そんなことはやめなさい。」と神様は言うておられます。

✂ 覆いを取り除けよ

私たちの土台は神であることの証明は、哲学が取り組んできました。プラトンから始まり、哲学とは神証明の学問でもあります。

たとえば、あなたは自分が不幸だと思ったことはありませんか。なぜそう思うのか、それは幸せを知っているからです。光を知らなければ光がほしいとは思わないように、幸せが何かを知らなければ、不幸はわかりません。その幸せをあなたに教えたのは誰でしょうか。人は自由を奪われたり束縛されたりすると腹が立ちます。ありや蜂は文句を言わずに働きます。人が文句を言うのは疲れるからではありません。それは、何者にも束縛されない自由を知っているからです。なぜ人は自由を知っているのでしょうか。

人は死を恐れます。それは、永遠を知っているからです。生きるということを知っているからです。誰があなたに永遠といのちを教えたのでしょうか。それが制約されたり否定されたりすることを恐れるのはなぜなのでしょう。

それは、神がいて、神が人にこれらのことを教えているからです。神はいのちであり、自由であり、永遠です。その神が私たちの土台なのです。哲学者はいろいろな言葉を使ってこのことを説明するわけですが、確かに私たちの土台に神がおられるという前提がなければ、私たちの行動や意識の説明がつかなくなります。しかし、死が入って以来、人は、神が自分の中におられることに全く気付かなくなっていました。「自分は一人だ、神から見捨てられた」そう思っている人が多いのですが、そうではありません。あなたが気づかないだけで、神はいつも共におられます。それが、聖書が私たちに教えていることです。

つまり、私たちには覆いがかかっている、自分が見えていません。カントという人は、私たちが認識できるのは空間と時間という現象であって、真実な姿ではないと言いました。だ

から、私たちの問題は何かというと、自分で自分を認識していると錯覚していることなのです。自分のことを何も知らないのに、わかっていると思い込んでいるのです。

どうしたら知ることができるのでしょうか。それは、聖書の言葉を信じるしかありません。私たちの中に神がいることを前提にしない限り、何の説明もつかないのです。

私たちには神の土台がある——これが真実な姿です。でも、私たちには覆いがかかってしまって、自分は一人だと思ってしまうようになりました。そして、私たちは一生懸命行いで自分の価値を築こうとしていました。だから人を裁いてしまうのです。

そんな必要はないのです。聖書は、この覆いを取り除ける方法を次のように教えています。

「かえって、今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心にはおおいが掛かっているのです。しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（Ⅱコリント 3:15-18）

なぜ人が主に向くなら覆いを取り除かれるのでしょうか。キリストの十字架を見るということは、私たちのためにご自分のいのちを捧げたキリストを見るということです。つまり、あなたにはそれだけの価値があることが見えるのです。

そして、あなたは無条件で愛されている素晴らしい価値のあるものだということが本当にわかれば、うわべで人をさばくような愚かなことはしなくなるでしょう。すべての者が素晴らしいということがわかるようになるからです。

それが自由なのです。自由とは人を愛せることです。どうしたら自由になれるのか、それはあなたの本当の価値に気づくことです。その価値を知りたければ、主イエス・キリストを見上げなさいと教えられているのです。

十字架を見上げる時、私がある土台であり、あなたのうちに生きていることをあなたは知るようになります。あなたは神に無条件で愛されている素晴らしいものです。そのことを知ることができるようになると、次に、ほかの人を愛することができるようになるのです。